

宮田 和樹（みやた・かずき）先生

株式会社実業之日本社

マーケティング部／コンテンツ事業部 主任

株式会社実業之日本社 マーケティング部 兼

コンテンツ事業部主任。1972 年、愛知県犬山市生まれ。

慶應義塾大学政策・メディア研究科修士課程修了。

オーストラリア、ウズベキスタン、アメリカ南部での旅と思索を経て、2001 年からネット業界へ。ヤフー株式会社、マイクロソフト株式会社で、ポータルサイトのトップページや

パーソナライズサービスの企画を担当。2009 年 8 月から、現職。

主な担当に、『志高く 孫正義正伝 完全版』（iOS アプリ版）や

『ブックビジネス 2.0 ウェブ時代の新しい本の生態系』（印刷版・

iOS アプリ版）の企画、実業之日本社ホームページのリニューアル、

アウトドアデিজパン（野外イベント）での Ustream 中継など。

主な作品に、『デジタル・ブーメラン』（『10+1 No.8 特集=トラヴェローク、トライブ、トランスレーション — 渚にて』、INAX 出版、1997 年）など。

主な論文に、『ノマディック・トラヴェロロジへの試み—ブルース・チャットウィンにみる

ノマディズムとトラヴェローク』（『記号学研究 20』、東海大学出版会、2000 年）など。

青山学院大学 総合文化政策学部 非常勤講師（2012 年度後期）。

**《講義概要》**

株式会社実業之日本社マーケティング部／コンテンツ事業部主任として、電子書籍の企画に携わり、出版産業の最前線でその発展に尽力する宮田和樹氏が、出版社の権利ビジネスと読書の未来について講義を行った。

講義ではまず、出版市場の現状やその背景について詳細なデータを用いて分かりやすく説明。出版市場が近年減少を続けている要因に、「読者＝消費者の時間とお金が携帯やネットに移動したこと」が大きく関係しており、利用時間の急増しているスマートフォンや電子書籍が今後の出版産業において重要なポイントとなることを示した。また、電子書籍を普及させるための課題と新しい本の可能性について解説。学生に電子書籍の奥の深さとその魅力を伝え、新たな視点で出版産業について見つめ直すきっかけを与えた。

さらに、出版社の権利ビジネスに関する 2 つの事例を紹介し、新たな著作権保護のあり方や権利ビジネスの可能性を示し、今後の出版産業の展望を考えるヒントを示した。

学生は出版産業の実態をリアルタイムで学び、出版ビジネスにおいて「創造的に考える視点」が今後さらに求められていることを痛感した。

《受講生の感想》

●電子書籍のメリットは多くの本をひとつの端末で手軽に楽しめるだけでなく、その内容を通して多くの人と繋がることができることであり、これまで音楽や映像が共有されてきたように、とても需要のあるものだと思います。しかし、「共有できる」ということは、音楽と映像と同じように著作権などの問題に直面するという意味であり、それを規制することは難しいということも理解することができました。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

●現在、インターネットでは色々な情報が無償で手に入るという便利さゆえに、著作権保護に対する人々の意識が低くなり、コピーが平気で行われている。インターネットの便利さを活用し、かつ、著作権の権利を保護することを両立できる方法はないのかと考えさせられた。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

●facebook などの既存のコンテンツを利用して読書の幅を広げたり、読書を通して新たな繋がりを見つけるという方法は新鮮でした。出版業界は電子コンテンツを利用した新たな方向性を見出せなければ、右肩下がりそのままなので、新しいことに挑戦していくということは非常に重要であると感じた。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

●電子書籍の今の動きを具体的に知ることができ、とても興味深いものでした。Facebook の“ book ”を読み解いていくべきであることや、Pottermore の考え方、デジタルマンガギルドの海賊版減少への取組みなど本当に新しい考えやシステムであると思い、すごく革新的であると思いました。そして、インターネットや技術が進む中でも大切であることは人と人とのコミュニケーションではないのかと思いました。

立命館大学・映像学部・4 回生

●本を買う、読むということがデジタル化によって大きく変化していることを知ることができた。まだ日本はアメリカなどに比べると電子書籍やソーシャルネットワークなどが広まっていないが、これらの最新ネットワーク技術をうまく利用することで様々な利点を生み出すことができ、ツールは使い方次第であり、創造力を豊かにすることがこれから求められるのだと感じた。

立命館大学・法学部・3 回生

●人と人との繋がりがグローバルに広く繋がってきている今日において、改めて、この繋がりを生かしてビジネスを行わなければならないと思った。また、海賊版撲滅への対策にも新しい視点が生まれ、この発想は出版社のビジネスだけでなく、他の産業にも必要であると思った。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

